

口で坐つてゐなければならぬさうだ。

風呂に這入らないか、二三日とまつて行かないかね」

無想庵は言つた。

『宮島資夫も轉々として職業を替える男でね、辻潤は學究だし』それから京都で新聞記者をしてゐる頃の事、最初 結婚の話。

『僕は高等學校時分に、線をヒイタリ、字を逆さまに書いたり、何やら解らないものを好く書いてゐたが、それを讀んで小山内薫がほめたりしてネ。

要するに太陽の内側は、黒い岩のやうださうだ。君は舐めたがつてゐるような詩を書いてゐたが』とか、

外國の町や家の穢い事、ダヴィストの畫の話。

無想庵が立つた時に、後頭部がソグでゐる事を知つた。斷髪した角力とりみたいだ。

インバネスを着て、停車場まで一緒に來て、之から海岸へ行くからと言つて別れる。